

古英語と古フリジア語の音変化の類似点と相違点について

On similarities and differences between Old English and Old Frisian sound changes

森 基雄
Motoo MORI

要旨

古英語 (Old English) はゲルマン語派において古フリジア語 (Old Frisian)、古サクソン語 (Old Saxon) とともに北海ゲルマン語 (Ingvaenic または North Sea Germanic) というグループを形成していた。そして本稿で注目する特に音変化の点で古英語と古フリジア語との間にもみ見られる注目すべきいくつかの類似点があることから、この両言語は北海ゲルマン語の中でもさらに独自のグループとして位置づけられることが多い。すなわちアングロ・フリジア語 (Anglo-Frisian) という中間祖語があったとする見方である。確かにこの両言語間に限った類似点はあるが、両言語が個々に発達させた部分もあるかもしれない。

本稿では、ゲルマン祖語から北西ゲルマン祖語、西ゲルマン祖語という段階を経て北海ゲルマン語の古英語と古フリジア語が成立していった中でまず両言語間で確認できる北海ゲルマン語としての共通の特徴を取り上げ、そして両言語間の類似点だけでなく、その中に見られる細かな相違点についても、アングロ・フリジア語という概念と照らし合わせて論じていきたい。

キーワード：アングロ・フリジア語、硬口蓋化、歯擦音化

1. 両言語にのみ共通に反映されていると言える音変化

古英語と古フリジア語にほぼ限定して見られる音変化の主なものは次のとおりである。

- ・ (IE ē > Gmc æ (ē₁) >) WGmc ā は鼻音の前で ā に鼻音化され、さらに ǫ に円唇化された：OE, OFris mōna, OS, OHG māno, Go mēna ‘moon’ ; OE, OFris nōmon, OS, OHG nāmun, Go nēmum ‘they took’。
- ・ 鼻音化の環境にはなかった WGmc ā の前舌化：OE dǣd (WS), dēd (Angl), OFris dēd (e), OS dād, OHG tāt, Go gadēps ‘deed’。
- ・ WGmc a は鼻音の前で ā に鼻音化され、さらに ǫ に円唇化された：OE, OFris land, lond, OS land, OHG lant ‘land’。
- ・ 鼻音化の環境にはなかった WGmc a の前舌化。この音変化は古英語文法ではアングロ・フリジア明音化 (Anglo-Frisian Brightening) と呼ばれるものである：OE fæder, OFris feder, OS fader, OHG fater ‘father’。
- ・ Gmc a + 鼻音n + 無声軟口蓋摩擦音 [x] は、ゲルマン祖語の段階ですでに [ǣx] となっていたとされ、これがさらに円唇化により [ōx] となった：OE brōhte, OFris brōchte, OS, OHG, Go brāhta ‘brought’ (<*[brǣxt-]

<*[branxt-])。>

・WGmc a, i, u + 鼻音 + 無声摩擦音 [s, θ, f] は、北海ゲルマン語では [ǣ, ī, ū] + [s, θ, f] となり、古英語と古フリジア語ではそこへさらに ǣ の円唇化が徹底して加わり、ō, ī, ū + [s, θ, f] となった：OE gōs, OFris *gōs (ModWFrīsis goes)、OS *gōs (MLG gōs)、OHG gans ‘goose’；OE oþer, OFris oþer, OS ādar, oþar, andar, OHG andar, Go anþar ‘other’ (<*anþera-)；OE sōft, sēfte ‘soft, gentle’、OFris sēft(e) ‘soft(ly)’、OS sāftor ‘more soft’、OHG samft, semfti ‘easy’ (なお、OE sēfte, OFris sēft(e) の ē はさらに i-ウムラウトが加わった結果である)；OE sīþ, OFris sith, OS sīd, OHG sind, Go sinþs ‘companion’；OE, OFris, OS fif, OHG fimf, finf ‘five’、Go fimf；OE, OFris, OS ūs, OHG, Go uns ‘us’；OE mūþ, OFris mūth, OS mūd, OHG mund, Go munþs ‘mouth’。

・軟口蓋子音 [k, kk, g, g, gg] の硬口蓋化 (palatalization)。

・WGmc ai の ā への単母音化。

両言語間に見られるこうした類似点が中間祖語としてのアングロ・フリジア語という概念の根拠となっているのであるが、本論に入るに先立ち、また本稿全体に関わる前提として、(IE ē>)Gmc æ(ē₁)と OE æ, ē, OFris ē との間には WGmc ā という中間段階が存在したのかどうかという問題がある。WGmc ā は存在したとするのが多数派意見であるが、Wright & Wright(1925³:63)、Bennett(1950)、Grønvik(1998:87-89)、Kortlandt(2008)のように WGmc ā という中間段階は存在せず、前母音として保たれていたとする学者もいる。確かに WGmc ā という前提では前母音>後母音>前母音という回りくどいプロセスが必要となり、ゲルマン祖語の前母音が古英語と古フリジア語では前母音として引き継がれたとする方がプロセスとしては簡潔である。しかし Ringe & Taylor(2014:12-13)は WGmc ā という中間段階の存在を改めて強調している。Ringe & Taylor が挙げている根拠の中でまず注目すべきものは前記のように Gmc æ が鼻音の前では o となっていることであり、これは WGmc ā という中間段階なしではどう説明がつかないものと思われる。さらに Ringe & Taylor が有力な根拠となりうるものとして挙げているのが副詞 ‘there’ と ‘where’ である。Ringe & Taylor はゲルマン祖語ではこれらはどちらも短母音 a を有する *par(Go, ON þar) と *h^war(Go hvar, ON hvar) であったが、この a が西ゲルマン語では何らかの強勢によって ā に長音化され、WGmc ā と併合した結果が OS thār, hwār, OHG dār, wār であり、ā がさらに前舌化されたのが OE(WS)þær, hwær, (Angl)þēr, hwēr, OFris thēr, hwēr であったとしている。これはまさに Gmc æ>WGmc ā>OE æ, ē, OFris ē というプロセスを反映するものに他ならないと言えるかもしれない。従って本稿では WGmc ā という中間段階を認めた上で議論を進めていくことにする。

次に古英語と古フリジア語の各々に関する早期の代表的な音変化を、本稿のこの時点ではまだその詳細や生起順序については不明確な形ではあるが、その音変化の両言語間での結果と生起順序が異なると思われるものも追加した形で一覧にまとめてみた (なお、これについては主に Bremmer(2009)、Campbell(1959)、Hogg(1992)、Ringe & Taylor(2014)、Stiles(1995)を参考にした)。

古英語に関するもの：

・WGmc a, ā の ā, ǣ への鼻音化とそれに続く o, ö への円唇化。そしてこの円唇化にはゲルマン祖語と北海ゲルマン語の段階で生じていたとされる (a+鼻音+無声摩擦音>) ā+無声摩擦音における ā も加わった。

・鼻音化の環境にはなかった WGmc ā の前舌化。

- ・ WGmc ai の \bar{a} への単母音化：OE þā, OS thē, Go þai ‘those’ (主格対格複数)。
- ・ 鼻音化の環境にはなかった WGmc a の前舌化。
- ・ 割れ (breaking)。
- ・ 硬口蓋化。これは WGmc a, \bar{a} の前舌化後に起こった。なぜならば WGmc a, \bar{a} に先行する語頭の軟口蓋子音はこの前舌化による結果音によって初めて硬口蓋化されたからである。これは i-ウムラウト (あるいは少なくとも i-ウムラウトの一部の結果音の非円唇化) に先立って起こった。
- ・ 硬口蓋二重母音化 (palatal diphthongization)。
- ・ i-ウムラウト。

古フリジア語に関するもの：

- ・ WGmc a, \bar{a} の \bar{a} , $\bar{ä}$ への鼻音化とそれに続く o, \bar{o} への円唇化。そしてこの円唇化にはゲルマン祖語と北海ゲルマン語の段階で生じていたとされる (a+鼻音+無声摩擦音>) \bar{a} +無声摩擦音における $\bar{ä}$ も加わった。
- ・ 鼻音化の環境にはなかった WGmc a, \bar{a} の前舌化。
- ・ WGmc au の単母音化：OFris āge, OE ēage, OHG ouga, OS ōga, Go augō ‘eye’。
- ・ 硬口蓋化。これは WGmc a, \bar{a} の前舌化後に起こった。なぜならば WGmc a, \bar{a} に先行する語頭の軟口蓋子音はこの前舌化による結果音によって初めて硬口蓋化されたからである。またこれは i-ウムラウト (あるいは少なくとも i-ウムラウトの一部の結果音の非円唇化) に先立って起こった。
- ・ WGmc ai の \bar{a} , \bar{e} への単母音化：OFris thā, OE þā, OS thē, Go þai ‘those’ (主格対格複数)；OFris stēn, OE stān, OS stēn, OHG stein, Go stains ‘stone’。
- ・ i-ウムラウト。
- ・ 割れ。

2. 両言語における WGmc a, ai, au の動向

Stiles (1995 : 194, 198, 199) が古英語と古フリジア語について挙げた第1番目の音変化として WGmc \bar{a} の鼻音化とその結果音 $\bar{ä}$ の \bar{o} への円唇化は両言語への分裂に先立つアングロ・フリジア語における現象であったと考えられるが、WGmc a の鼻音化とその結果音 \bar{a} の o への円唇化は両言語において方言や地域によっては長音 $\bar{ä}$ の場合ほど徹底していたわけではないことから、アングロ・フリジア語に含まれるのは \bar{a} への鼻音化の段階までであったと考えられる。

WGmc a の前舌化もまた両言語に共通に反映された変化であるとは言え、両言語において鼻音の前以外で例外なく無条件に前母音となって現れているわけではない。もちろん両言語への分裂後の語形変化表内での均等化も一部考えられるが、その前母音が現れている環境が両言語で完全に一致しているわけでもない。古英語では次音節に後母音が後続していた場合や、特にアングリア方言では先行の語頭子音や後続の子音結合の種類によっては前舌化が反映されていない場合があり、また同様のことは古フリジア語についても言える。古英語の場合、鼻音の前以外ではいったん前舌化は起こったが、のちに特定の環境でそれが失われたとする見方が有力である。そして古フリジア語において鼻音の前以外で前舌化を示さないケースについては Campbell (1939 : 94-95)、Fulk (1998 : 154)、Ringe & Taylor (2014 : 198-199) のように、いったん前舌化は起こったが、のちに特定の環境でそれが失われたとする見方と、Bremmer (2009 : 29) のように、そもそもその場合は前舌化が起らなかったとする見方がある。

WGmc \bar{a} の前舌化の順序についてであるが、この変化は古英語の視点に立てば $ai > \bar{a}$ の、古フリジア語の視点に立てば $ai > \bar{a}$ と $au > \bar{a}$ の単母音化に先立つものであったと考えられる。なぜならば、Campbell(1939 : 90 ; 1959 : 52)、Hogg(1992 : 79)、Stiles(1995 : 197)、Bremmer(2009 : 29) も指摘するように、もし逆の順序であったなら、WGmc \bar{a} と同じく古英語では ($ai >$) \bar{a} もまた WS $\bar{æ}$ 、Angl \bar{e} に、また古フリジア語では ai と au のいずれに由来する \bar{a} も \bar{e} に前舌化されてしまったはずだからである。ただ古フリジア語では ai が \bar{a} となっただけでなく、i-ウムラウトの環境になかった場合でも \bar{e} となったケースもあり、このような2つの結果に至った原因については解明されているとは言えない。

古英語に関して言えば、Campbell(1959 : 52)、Hogg(1992 : 79) は WGmc ai の \bar{a} への単母音化と WGmc a の前舌化はあくまでも古英語に個別に起こった変化であり、しかも WGmc ai の \bar{a} への単母音化は WGmc a の前舌化に先立って起こったとしている。その理由として、もし WGmc a の前舌化が先であったなら、 ai は $\bar{æi}$ となっしまい、さらにこの $\bar{æi}$ が \bar{a} となるという音変化は考えにくいという。他方 Goblirsch(1991 : 18) のように、アングロ・フリジア語において WGmc ai は WGmc a の前舌化とは無関係に \bar{a} に単母音化されたのであり、古フリジア語ではこの \bar{a} と並んで見られる \bar{e} は古サクソン語の影響によるものとする意見もある。

しかし Fulk(1998) は、 ai 、 au の両言語における現れ方は確かに異なってはいるものの、その変化の第1段階は実は両言語に共通であり、それは第1要素 a の前舌化であり、WGmc a 、 \bar{a} の前舌化と同質で同時期の変化であったとしている。しかしこの考え方では ai 、 au の両言語における現れ方の大きな違いについての説明が困難となるであろう。

そこで Fulk(1998 : 142-145) はアングロ・フリジア語において ai はまず $\bar{æi}$ となり、WGmc a の前舌化のケースと同じく環境により、特に次音節の母音によって $\bar{æi}$ のままである場合と ai に戻る場合とがあり、 $\bar{æi}$ は $\bar{æ}$ となり、古フリジア語ではさらに \bar{e} となり、 ai は \bar{a} となっただけとしている。例えば WGmc * $stain$ 'stone' はアングロ・フリジア語では主格対格単数形が * $stæin$ 、複数形が * $stainas/-az$ だったのであり、OE $stān$ の \bar{a} は複数形 * $stainas/-az (> stānas)$ に由来するのに対し、OFris $stēn$ は直接 * $stæin$ に由来するものであり、これは OE $dæg$ 'day' と複数形 $dagas$ と間での $\bar{æ} \sim a$ の交替と同一視できるものであるという。さらに Fulk(1998:145) は (WGmc $ai >$) OE \bar{a} の i-ウムラウトの結果音を有するとされる (* $laizjan >$) OE $læran$ 'to teach' (OFris $lêra$) についても、これは WGmc ai が i-ウムラウトに先立つ a の前舌化により $\bar{æi}$ となり、これが $\bar{æ}$ に単母音化された結果であり、i-ウムラウトとは無関係であるという大胆な主張をしている。しかし 'stone' のような a-語幹名詞で語根母音の WGmc ai を有する古英語の名詞は数多く存在する以上、主格対格単数という主要形で Fulk の提案する $ai > \bar{æi} > \bar{æ} > OE \bar{æ} (=OFris \bar{e})$ を直接反映する例も見られるのが自然ではないだろうか。確かに古フリジア語では \bar{a} の例も \bar{e} の例も見られるのであるが、古英語で見られるのはもっぱら \bar{a} ばかりであり、Fulk の主張する $\bar{æi} \sim ai$ の交替が実際に存在していたとは考えにくい。従って OE $læran$ の $\bar{æ}$ はやはり (WGmc $ai >$) OE \bar{a} の i-ウムラウトの結果であり、WGmc a の前舌化とは無関係であったと考えられる。

WGmc au はその WGmc a の前舌化との関係はともかく、古英語では第1要素の a が前舌化された結果まず $\bar{æu}$ となり、さらに Lass(1994 : 51) が指摘するように、二重母音高さ調和 (Diphthong Height Harmony) によって第2要素の u が第1要素の $\bar{æ}$ と舌位が同じ高さの後母音 a となり、 $\bar{e}a$ と表記される二重母音 (第1要素の \bar{e} は $[\bar{æ}]$) となっただけと考えられる。

Fulk は古フリジア語の場合もまた WGmc au は古英語と同様にその第1要素の前舌化を反映する $\bar{æu}$ という段階を有していたとしているが、果たしてそうであろうか。WGmc au は古フリジア語では \bar{a} への単母音化という古

英語とは異なる結果を示している以上、これは古フリジア語に起こった変化であるように思える。Fulk(1998:151)はアングロ・フリジア語の段階で au は WGmc a の前舌化によっていったんは æu となったものの au に戻り、それがさらに ā に単母音化したとしているが、æu が au に戻った具体的な要因については明らかにしていない。その要因は例えば次音節の母音にあったのであろうか、あるいは二重母音の第2要素の後母音 u にあったのであろうか。

Laker(2007:178-179)はこのFulkの見解を疑問視し、Fulkへの反論となるものとしてKrupatkin(1970)とGoblirsch(1991)の見解に注目している。Krupatkinは古英語の二重母音は前母音+後母音という音素として長母音組織に組み入れられたものであり、この前母音+後母音が低舌母音から成る ēa は高舌母音から成る iū や中舌母音から成る ēo と対等に生じたものであって、WGmc a の前舌化とは無関係であったとしている。Goblirsch(1991)はアングロ・フリジア語の段階で au は æa を経てすでに古英語における結果と同一の ēa となっていたのであり、古フリジア語ではさらにそれが第2要素へのアクセントの急激な変化により ā に単母音化されたとしている。またKortlandt(2008:267)はWGmc au>OE ēa の変化は au の第1要素 a の古英語における独自の前舌化の結果であり、アングロ・フリジア語の段階での a の前舌化とは無関係であるとしており、Ringe & Taylor(2014:155, 171)は au、そして特に ai の動向についてもWGmc a の前舌化とは切り離してとらえている。

WGmc ai が古フリジア語では i-ウムラウトの環境にはなかった場合でも WGmc ā の反映と同じく ē という現れ方をするケースがあるのはなぜであろうか。この点については前記のFulkの見解も含め、後続の母音や子音の影響などさまざまな解釈が考えられる中で、この疑問に対するVoyles(1992:169-170)の提案に注目してみたい。

VoylesはWGmc ai, au の変化をWGmc a の前舌化後の現象として取り上げ、この双方の二重母音の変化について独自の過程を提案しており、その概要は次のとおりである。ai はまず開音節でのみ æ となり、また au はすべて ū となった。すなわちまず ai, au はともに長音かつ低舌音の æ, ū となり、さらにこの æ と ū はどちらも ā となった。そして ai>æ の変化の領域は閉音節にも広まり、さらにこの場合でも Gmc x, p, b, m, w の前であれば ā となった一方、この条件下にはなかったために ā とならなかった æ はのちに ē となったという。Voylesはこの音過程を具体例で示しており、ここではその中から *bain ‘bone’、*baum ‘tree’、*klaiθ ‘clothing’ とその複数形 *klaiθazu、*raip ‘rope’、*baines(属格単数) ‘bone’、*flaiskes(属格単数) ‘flesh’、*saibres(属格単数) ‘dampness’、*twai ‘two’、*raixtō ‘reached’ を取り上げてみると：

段階1 : *bain、*bōm、*klaiθ、*klæθazu、*raip、*bāenes、*flæskes、*saibres、*twæ、*raixtō

段階2 : *bain、*bām、*klaiθ、*klāθazu、*raip、*bānes、*flāskes、*saibres、*twā、*raixtō

段階3 : *bāen、*bām、*klæθ、*klāθazu、*ræp、*bānes、*flāskes、*sæbres、*twā、*ræxtō

段階4 : *bāen、*bām、*klæθ、*klāθazu、*rāp、*bānes、*flāskes、*sābres、*twā、*rāxtō

そしてさらに æ は ē となり、また子音群の前で ā は a に短音化されたため、最終的には bēn(ē=[ɛ])、bām、klēth、klāthar、rāp、bēnes(本来形であるべき*bānesに代り)、flaskes、sāvres、twā、rachte となった。bēnesのēは主格と対格の単数形 bēn、あるいは低地ドイツ語からの影響が考えられる。

またVoylesは実例は示していないが、æ>āのmの前での例としては hēm、hām ‘home’ <*haim、そしてwの前での例としては āsega、āsiga ‘law-sayer’におけるā-‘law’ <*aiw-(OE æ(w)-<*aiwi-) や ā ‘je, immer, beständig, ewig’ (Go aiw) がある。そしてVoylesの見解に従うならば、*haimはhēmではなくhāmとなるのが本来の発達のはずであり、hēmは例外ということになるのであろうか、あるいは低地ドイツ語から借用されたものなのであろうか。

ところで Voyles が ai の単母音化に由来する \bar{e} [\bar{e}] の前段階として敢えて $\bar{æ}$ を設定しているのには理由がある。それは WGmc \bar{a} >OFris \bar{e} との関係であり、Voyles(1992: 170) は単母音化に由来する \bar{e} と WGmc \bar{a} に由来する \bar{e} はともに音価は WGmc \bar{e} からの \bar{e} [\bar{e}] と区別して [\bar{e}] であったと考える。その理由として、もし仮に ai の単母音化の結果音が中間段階 $\bar{æ}$ を経ずに初めから [\bar{e}] であったなら、そしてその結果として (WGmc \bar{a} >)OFris \bar{e} [\bar{e}] にも上記の段階 2 における開音節での \bar{a} への変化が適用されていたならば、それは (WGmc \bar{a} >)OFris \bar{e} [\bar{e}] もまた同じく \bar{a} となってしまうと指摘している。Voyles はこのことを裏付けるために OFris *slēpa*[*slēpa*] ‘to sleep’ を例に取り、これは Gmc **slēpan*(Voyles は Gmc $\bar{æ}$ (\bar{e}_1) を常に \bar{e} と表記している) >WGmc **slāpan*>OFris *slēpa* [*slēpa*] という過程を経たものであり、ai の単母音化の段階 2 の \bar{a} への段階 1 での入力 が Voyles の提案する $\bar{æ}$ ではなく初めから [\bar{e}] であったなら、*slēpa*[*slēpa*] もまたこの変化に巻き込まれて***slāpa* となっていたはずであると主張している。すなわち *klāthar* が **klaiθazu*>**klēθazu*>**klāθazu* ではなく *klaiθazu*>**klæθazu*>**klāθazu* という音過程を経た結果でなければ、‘to sleep’ は *slēpa*[*slēpa*] から***slāpa* となっていたことになる。

3. 硬口蓋化、割れ、i-ウムラウトとその生起順序

次に硬口蓋化、割れ、i-ウムラウトについて論じていくことにするが、これらは確かに両言語において互いに類似した現象とは言えるものの、それらは両言語で個別に起こったとする見方が一般的であるが、硬口蓋化については Fulk、Laker はアングロ・フリジア語の段階で起こっていたとしている。

まず軟口蓋子音 [k, kk, g, gg] の硬口蓋化 (>[k', kk', g', gg']) とそれに続く歯擦音化 (assibilation)、[g] の硬口蓋化 (>[g']) とそれに続く Gmc [j] との併合とさらにその母音化についてであるが、これもまたアングロ・フリジア語という概念を裏付ける重要な根拠の 1 つとされる。両言語における硬口蓋化の環境は非常に共通しており、それは前後に位置する前母音や後続の j の影響によるものである。大まかではあるが、次にできるだけ明確なくつかの具体例を示す。

[k, kk] の硬口蓋化

- ・[-k] に前母音 (後母音の i-ウムラウトに起因するものを除く) が後続していた場合: OE *cinn*、OFris *tsin*、OS、OHG *kinni* ‘chin’; OE *cýtel*<**cietel*、OFris *tsetel* ‘kettle’ <**k’ætil*<**kætil*<WGmc **katil*(OHG *kezil*、Go *katilē*); OE *cýse*<**ciēse*、OFris **tsēse*、*tsīse* ‘cheese’ <**k’æsi*<**kæsi*<WGmc **kāsī*(OS、OHG *kāsi*)<L *cāseus* (もちろん **kætil* の $\bar{æ}$ 、**kæsi* の $\bar{æ}$ はそれぞれ WGmc \bar{a} 、 \bar{a} の前舌化によるものであり、i-ウムラウトとは無関係である)。
- ・[-k] に i (>e) が後続していた場合: OE *bryce*、OFris *bretse*、*breke*、OS *bruki* ‘(a) break’; OFris *bretsen* ‘broken’ <**bruikin* (OE *brocen*、*gebroecen*); OE *gēmierce* ‘mark, landmark, boundary’、OFris *hem-mertse*、*hem-merke* ‘village common’、ON *merki* ‘mark, landmark, boundary’; OE *riče*、OFris *rike*、*rīze*、OS *riki* ‘rule, kingdom’。
- ・[-k] に j が後続していた場合: OE *ræcan*、OFris *rētsa*、*rēka* ‘to reach’ <**raikjan*; OE *sēcan*、OFris *sētsa*、*sēka*、OS *sōkian*、Go *sōkjan* ‘to seek’。
- ・[-kk-] に j が後続していた場合: OE *þryccan*、OFris **thretsa*、*thritsa*、OSwed *þrykkja* ‘to press’。
- ・[-k] に i が先行していた場合: OE *dič* (後母音が後続する複数形では硬口蓋化のない *dicas*)、OFris *dik* ‘ditch’ (予想に反し硬口蓋化が反映されていない原因については後記で述べる)。

[g、g、gg] の硬口蓋化

・[-g-] に前母音（後母音の i-ウムラウトに起因するものを除く）が後続していた場合：OE *geaf*、OFris *jef* ‘gave’（直説法過去 1、3 人称単数）<*[g’æb] <*[gæb] <WGmc *[gab] (OS *gaf*)；OE *gēafon*、OFris *iēvon* ‘gave’（直説法過去複数）<*[g’æbun] <*[gæbun] <WGmc *[gābun] (OS *gābun*)；OE *gieldan*、OFris *jelda*、OS *geldan* ‘to pay (for)’。

・[-g-] に i が後続していた場合：OE *hyge*、OFris *hei*、OS *hugi* ‘mind’。

・[-g-] に j が後続していた場合：OE *biegan*、OFris *bēia*、OS *bōgian*、ON *beygja* ‘to (make) bend’。

・[-g]、[-g-] に前母音（上記の OE *hyge*、OFris *hei* のような後母音の i-ウムラウトに起因するものは除外）が先行し、かつ直接 [-g-] に後母音が後続していなかった場合：OE *dæg*、OFris *dei*、OS *dag*、ON *dagr* ‘day’；OE *weg*、OFris *wei*、OS *weg*、ON *vegr* ‘way’；OE *segl*、OFris *seil*、OS *segl* ‘sail’；OE *nægl*、OFris *neil*、ON *nagl* ‘nail’；OE *brēdan*、OFris *breida*、ON *bregða* ‘to brandish’；OE *mæg*、OFris *mēi*、-*mēch* ‘kinsman’ <*[mæg] <WGmc *[māg] (OS *māg*)。

・[-g] に i が後続していた場合：OE *genge*、OFris *gendze* ‘appropriate, agreeable’、OHG *gengi* ‘customary’。

・[-g] に j が後続していた場合：OE *mengan*、OFris *mendza*、OS *mengian* ‘to mingle, to mix’；OE *swengan* ‘to strike in many places, to bear’、OFris *swenga*、*swendza* ‘to water, to sprinkle’ <*[swangjan]、Go *afswaggwjan* ‘schwankend machen’。

・[-gg-] に j が後続していた場合：OE *eçg*、OFris *edze*、*egge*、OS *eggia* ‘edge’ <*[aggjō]；OE *leçgan*、OFris *ledza*、OS *leggian* ‘to lay’。

硬口蓋化が起こったことを明確に確認できるのはそれに続く歯擦音化、[j] との併合やさらにその [i] への母音化という結果を通してであり、しかも両言語間でその歯擦音化の結果は OE *ç[tʃ]*、*çç[ttʃ]*；OFris *ts*、*z[ts]*；OE *çg[dʒ]*、*[ddʒ]*、*g[dʒ]*；OFris *dz* のような相違を示す。ただし上記の OFris *breke*、-*merke*、*rike*、*rēka*、*sēka*、*dik*、*swenga*、*egge*、-*mēch* のように軟口蓋音のままの例もあり、-*mēch* はさらに語末の [g] が [x] に無声化したことを示している。

他方、Stiles(1995:195、199) は両言語間の語頭での不一致の例として L *caupō* ‘tavern-keeper; hawker’ に由来するとされる OE *çēapian* ‘to trade, to buy’ と OFris *kāpia* ‘to buy’ を挙げ、WGmc a の前舌化に由来する OE *æ* と WGmc *au* に由来する OE *æu* は古英語独自に起こった WGmc a の前舌化の結果であり、OE *çēapian* の *ç* もアングロ・フリジア語ではなく、古英語における前舌化に起因するとしている。

しかし *au* の第 1 要素が仮にアングロ・フリジア語においていったん *æ* に前舌化されていたのであれば、**kau* > **kæu* > (硬口蓋化により) **k’æu* となっていたかもしれない。すなわち古英語では *k* がここからさらに歯擦音化という次の段階に進んで *ç* となったのに対し、Fulk が主張するように古フリジア語ではそうならず歯擦音化の段階までに *æu* が *au* に戻ったために *k* の硬口蓋化が失われて軟口蓋音に逆戻りしたからなのであろうか。あるいは (*æu*)*ēa* が Goblirsch の主張どおり第 2 要素へのアクセントの急激な変化によって後母音 *ā* となったために *k* が軟口蓋音に逆戻りしたからなのであろうか。もしこのように *k* が場合によっては軟口蓋音に逆戻りしたのであれば、硬口蓋化はアングロ・フリジア語における変化であり、その硬口蓋化が維持された場合には続いて古英語と古フリジア語において歯擦音化の段階まで進んだという解釈は成り立つであろう。あるいは WGmc *au* > OE *ēa* の変化は WGmc a の前舌化とは切り離して扱うべきなのであろうか。そして古フリジア語においても

WGmc au は WGmc a の前舌化とは無関係であり、従ってそれを経ることなく直接 *ā* に単母音化され、*k* の硬口蓋化とはずっと無関係であったということになるのであろうか。同じ疑問は本来語で同じく **kau-* を反映する強変化動詞 2 類の直説法過去 1、3 人称単数 OE *cēas*、OFris *kās* ‘chose’ (Go *kaus*) にも当てはまるであろう。

ところで Fulk の主張どおり *k* がいったんは硬口蓋化されたものの軟口蓋音に逆戻りするということが果たして実際に起こり得るのであろうか。語頭のケースではないが、Hogg(1992: 266-267)、そして Fulk(1998: 148) 自身もこのことが起こり得ることを裏付けられると思われる次のような具体的な事象を挙げている。

Hogg が注目しているのは OE *sēce* ‘I seek’ が硬口蓋化を示しているのに対し、*sēcp* ‘he seeks’ では軟口蓋音となっている点である。これはウェストサクソン方言の例であり、**sækip* > **sæk’ip* > *sēcp* [sékθ] という過程を経た結果であると思われる。すなわちアングリア方言での対応形 *sōēceð* では逆に歯擦音化に至っているのに対し、*sēcp* では *c* はいったん硬口蓋化されていたが、3 人称単数現在の接辞 **-ip* が語中音消失 (syncope) により *i* を失うと、*k* は後続子音 *p* とじかに接触したために硬口蓋化が失われたと考えられる。

また Fulk が挙げているのは OE *ēcniss* ‘eternity’ (>ME *ēknesse*) である。*ēcniss* の *ē* はこの表記のとおり、その第 1 要素のもととなった OE *ēce* ‘eternal’ (>ME *ēche*) から見て硬口蓋化されていたはずである。*ēc-* は元来 *ēce* と同じく形容詞語尾 **-i* (>*-e*) を有していたのであり、また *ē* はこの **-i* による *i*-ウムラウトに起因する母音であった。そして語中音消失によってこの語尾が失われると、さらに *ē* における硬口蓋化が後続子音 *n* との接触によって失われた結果が ME *ēknesse* という形で明確に反映されていると考えられる。

そしてさらに語頭以外について言えば、硬口蓋化に続く次の段階である歯擦音化の現れ方の不一致はフリジア語内だけではなく英語内にも見られる。Campbell(1959: 177) は歯擦音化を示す現代英語の *bridge*、*ridge*、*stitch*、*edge*、*sedg*、*wedg*、*birch*、*bench* (<OE *brycġ*、*hrycġ*、*stīce*、*eġġ*、*seġġ*、*weġġ*、*birċe*、*benċ*) に対し (*stīce*、*benċ* は *i*-語幹名詞であり、他は *ja-*、*jō-*、*jōn-* 語幹名詞である)、元の軟口蓋音を有する方言形 *brig*、*rig*、*steek*、*eg*、*seg*、*weg*、*birk*、ME *benk* の存在という事実を挙げており、Laker もこうした点に注目している。これはスカンジナビア語の影響によるものとする見方が一般的であるのに対し、Laker(2007: 182-183) はその名詞の変化表における硬口蓋化形と非硬口蓋化形との交替に原因を求める Luick(1935: 274) の見解を支持している。すなわち *ja-* 語幹名詞と *jō-* 語幹名詞の場合、接辞子音 *j* がいったん失われると、硬口蓋化された子音は数や格によって後続の前母音か後母音のいずれかと接触することになるのであり、歯擦音化へと後押しする前母音は単数形に、後母音は複数形に多く見られ、標準英語では硬口蓋化とそれに続く歯擦音化を反映する子音が一般化されたのに対し、他の方言形では硬口蓋化を受けたものの後母音との接触により硬口蓋化を失い、軟口蓋音に戻った子音が一般化されたのだという。また *i-* 語幹名詞の語根末子音についても本来予想される硬口蓋音ではなく軟口蓋音が見られる原因として、地域によっては *a-* 語幹化や *ō-* 語幹化が早くから進んでいたために歯擦音化には至らずに軟口蓋音に戻ったという可能性も考えられるかもしれない。そして [g] の軟口蓋音への逆戻りを示す古英語の注目すべき実例と見なせるものとして Campbell(1959: 177) が挙げている弱変化動詞 1 類 *wrēgan* ‘to accuse’ (<*wrēgan*)、*tēgan* ‘to tie’ (WS *tīegan*)、*flēgan* ‘to put to flight’ (WS *flīegan*)、元の *i-* 語幹から *a-* 語幹化された複数形 *belgas* ‘bags’ (WS *bielg* ‘bag’) などがある。

硬口蓋化はアングロ・フリジア語に起こったとする見方を支持する Laker は、英語についてのこの Luick の見解は古フリジア語において歯擦音化が欠如している例についても当てはまるものであり、それは硬口蓋化以降の方言間での結果の相違でしかなかったとしている。この点については Bremmer(2009: 32)、Ringe & Taylor(2014: 201) も同様の見解を示している。この見方を是とするならば、同様のことは前記の *ja-* 語幹名詞 *-mertse* ~ *-merke*、

rīze~rike、jō-語幹名詞 edze~egge、弱変化動詞 1 類 rētsa~rēka、sētsa~sēka、swendza~swenga についても言えるかもしれない。そして i-語幹名詞 breke については a-語幹化した複数形の影響が考えられるのであり、-mēch の場合、後母音が後続していたために硬口蓋化を受けずに保たれた複数形における [g] が主格対格単数における語末本来の硬口蓋化された [g'] に取って代わり、さらにそれが語末における無声音化を受けた結果である可能性が考えられる。

しかしアングロ・フリジア語という概念に懐疑的な Stiles(1995:195-196) は k の語頭以外での不一致の例としてさらに、どちらも Gk kūrīakón に由来する OE cīrice (この例は i が先行し、かつ i 以外の前母音が後続していた場合でも [-k-] は硬口蓋化されたことを示している)、OFris tserke 'church' (OS kirika) を挙げている。しかし女性名詞の OE cīrice は i-語幹でも jō-語幹でもなく女性弱変化名詞だったのであり、語尾は単数形では主格が -e、対格と属格と与格が -an、複数形では主格と対格が -an、属格が -ena、与格が -um であったため、最終音節の子音が k:k' (>OE c:c) という交替を示していたと考えられる。同様のことは cīrice と同じく女性弱変化名詞であり、語尾は単数形では主格が -e、対格と属格と与格が -a、複数形では主格と対格が -a、属格が -ena、与格が -um、-un であった OFris tserke、そして a-語幹名詞で OE diċ と同族語でありながら硬口蓋化が反映されていない OFris dik にも当てはまるかもしれない。すなわち OE cīrice、diċ ではそのしかるべき環境での硬口蓋化が反映されているのに対し、OFris tserke、dik の k は後続の接辞母音が後母音であったために硬口蓋化が起らなかった変化形に由来すると見なすことができるかもしれない。

このように硬口蓋化はアングロ・フリジア語で始まり、かつアングロ・フリジア語で終了したという前提に立てば、その結果としての硬口蓋子音は古英語と古フリジア語へ分裂後に歯擦音化と [j] への変化を経たという見方ができる一方、Laker(2007:169-172) はアングロ・フリジア語で始まった硬口蓋化はそこで終了したのではなく、古英語では初期の段階までは継続し機能していたとさえ主張している。

ここまでの議論だけでは硬口蓋化が両言語に個別に起こったのか、あるいはアングロ・フリジア語までさかのぼる現象なのかについての決定的な判断は困難であるが、Laker が主張するように、アングロ・フリジア語で起こっていたかもしれない硬口蓋化は両言語への分裂以前に終了していたわけではなく、古英語については初期の段階までは機能していた可能性は否定できないかもしれない。その根拠として Laker は特に英語に取り入れられたブリトン人のケルト語の地名が硬口蓋化を反映していることを指摘している。その実例として Laker(170) が挙げているのが Cheviot、Chevening <*kev̥n- 'ridge' ; Yeavinger <*gaβr- 'goat' ; Cheetham <*kēd- 'forest' である。

古英語における硬口蓋化と割れによる二重母音化の生起順序についてであるが、Campbell(1959:108)、Stiles(1995:194) は OE cēorl 'churl' <*kerl (OFris tserl) を例に取り、割れは硬口蓋化に先立って起こったと主張している。すなわち cēorl は *kerl > (割れ) *keorl > (硬口蓋化とそれに続く歯擦音化) cēorl という過程の結果であり、逆に硬口蓋化、割れの順であったなら、さらに硬口蓋二重母音化が働いて *kerl > *cerl > *cierl となっていたはずであるという。

しかし Laker(2007:194) が述べているように、Stiles がこのように硬口蓋二重母音化が硬口蓋化の直後か同時であったとする前提に立っていることが誤りであり、硬口蓋化とは異なり、硬口蓋二重母音化が見られるのは主にウェストサクソン方言に限定されている。硬口蓋二重母音化の主なケースとしては、k、g、sk が前母音 æ、ǣ、e、ē の前で硬口蓋化されると、次にこれらの前母音が硬口蓋化された k、g、sk の影響でそれぞれ ea、ēa、ie、īe に二重母音化されるという現象である。前記の OE gieldan 'to pay(for)' はまさにウェストサクソン方言形であるのに対し、ノーサンブリア方言形は gēlda、マーシア方言形は geldan である。また古フリジア語では sk の硬口蓋

化も、そして硬口蓋二重母音化そのものも起こらなかった。従って硬口蓋二重母音化が硬口蓋化後の古英語独自の現象であったことは明らかである。

そして古英語における割れとは前母音 æ , æ , e , ē , i , i が特定の子音または子音群の前でそれぞれ ea , ēa , eo , ēo , io , iō に二重母音化される現象であり、それが起こる環境は大まかに言えば、後続の子音または子音群が h , $\text{h} + \text{子音}$, $\text{l} + \text{子音}$, $\text{r} + \text{子音}$ であった場合である。なお、上記の giēdan , gēlda , gēldan に e の割れが見られないのは ld の前では WGmc e の割れが起こらなかったからである。

割れによる二重母音化は古フリジア語にも見られるが、古フリジア語ではそれが起こった範囲も条件も古英語とは大きく異なっていたため、割れは両言語において個別に起こった現象と考えられる（古フリジア語のケースについては具体的には後記で取り上げることにする）。

結局、Stiles の理論では割れと硬口蓋化の正確な順序を決定することは難しいが、硬口蓋化をアングロ・フリジア語ではなく古英語における音変化としてとらえるならば、Hogg (1992: 99) が主張するように、WGmc $^*\text{kalan}$ 'to cool' > (a の前舌化により) $^*\text{kælan}$ > (硬口蓋化に先立って次音節の後母音の影響による æ の a への逆戻りにより) OE calan , WGmc $^*\text{slahan}$ 'to slay' > (a の前舌化により) $^*\text{slæhan}$ > (次音節の後母音の影響による æ の a への逆戻りに先立って割れにより) $^*\text{sleahan}$ > OE sleān のような例から判断して、 æ の ea への割れ、次音節の後母音の影響による æ の a への逆戻り、硬口蓋化という生起順序が考えられることから、割れが硬口蓋化に先立って起こったと見なすことができる。しかしアングロ・フリジア語とその段階での WGmc a の前舌化と硬口蓋化を是とするならば、OE calan は WGmc $^*\text{kalan}$ からアングロ・フリジア語の $^*\text{k'ælan}$ 、そして古英語では次音節の後母音の影響による æ の a への逆戻りの結果 $^*\text{k'alan}$ 、そして逆戻りによる後母音 a の影響で k' の硬口蓋化が失われたために $[\text{tʃ}]$ への歯擦音化には至らずにもとの軟口蓋音に逆戻りした結果 calan となるという過程を経てきたということになる。すなわち Hogg が用いている硬口蓋化という言葉に置き換え、歯擦音化の前段階としてのアングロ・フリジア語における硬口蓋化を加えれば、前舌化、硬口蓋化、古英語における割れ、次音節の後母音の影響による æ の a への逆戻り、 $[\text{k}]$ > (歯擦音化により) $[\text{tʃ}]$ あるいは (逆戻りによる a の影響で硬口蓋化が失われた結果) 軟口蓋音 $[\text{k}]$ に逆戻りという順序であったという解釈が可能であろう。そして同様のことは同じく強変動詞 5 類で語頭に軟口蓋音 g を有する (WGmc $^*[\text{galan}]$ >) galan 'to sing' についても言えるであろう。すなわち galan が $^*[\text{g'ælan}]$ というアングロ・フリジア語の段階を有していたかどうかということである。

そして古英語におけるさらに注目すべき音変化として i-ウムラウトを挙げることができる。i-ウムラウトとは硬口蓋化の要因の一部でもある次音節の i , j がさらに先行母音の前舌化と場合によっては上げを引き起こすという現象である。i-ウムラウトは古英語と古フリジア語のみならず、ゴート語以外のすべてのゲルマン諸語に見られる現象ではあるが、その起こり方には各言語間での違いが多いことから、それは実際には個々のゲルマン語への分裂後に初めて起こったものと考えられる。さらに古英語そのものにおいてもまた i-ウムラウトの入力となった母音が古英語独自の音変化を i-ウムラウトに先立って受けた結果音であることを前提としなければ、i-ウムラウトによる結果音そのものについても説明がつかないことは明らかである。

このことを裏付けるケースとして特によく挙げられるのが硬口蓋化と i-ウムラウトの関係である。すなわち語頭の $[\text{k}]$, $[\text{g}]$ はこれに前母音が後続すると $[\text{k}']$, $[\text{g}']$ に硬口蓋化され、さらに $[\text{k}']$ は $[\text{tʃ}]$ に歯擦音化され、 $[\text{g}']$ はゲルマン祖語からの $[\text{j}]$ と併合したのに対し、後続の前母音が後母音の i-ウムラウトに由来する前母音であった場合には硬口蓋化もそれに続く歯擦音化も $[\text{j}]$ への変化も見られず、語頭の $[\text{k}]$, $[\text{g}]$ は軟口蓋音のまま

保たれ、[g] は閉鎖音 [g] となった。例: cēlan ‘to cool’ <*cōelan<*kōljan; cyning, cining ‘king’ (OS kuning); cýpan ‘to announce’ (OS kūdian); cælp ‘it gets cold’ <*kalip; cennan ‘to make known’ <*cænnan<*kannjan (Go kannjan); gēs ‘geese’ <*gōes<*[gōsi]<*[gansi]; genge ‘appropriate, agreeable’ <*[gang’i]; gylden (Kt gelden) ‘golden’ (OS guldin); forgægan ‘abweichen’ <*[gāg’jan] <*[gai’gjan]; cæg ‘key’ <*kāju<*kaiju。

硬口蓋化をアングロ・フリジア語ではなく古英語の段階での音変化と見なした場合でも、後母音の i-ウムラウトに由来する前母音の前では硬口蓋化の形跡が見られないのは硬口蓋化が i-ウムラウトに先立って起こっていたためであると言えるであろう。ただし Hogg(1992: 266) が主張するように、このことを確実に裏付けられると思われるのは、i-ウムラウトによって前舌化された後もしくは硬口蓋化の妨げとなっていたかもしれない円唇音であった (u, ū, ō>) y, ŷ, æ (のちにこれらは i, ī, ē に非円唇化された) や i-ウムラウトによって前舌化された後鼻音の前であったために円唇音の特性を有していたと思われる (a>) æ ではなく、鼻音の前以外の (a>) æ や (WGmc ai>OE ā>) æ のようなもともと円唇音とは無関係な環境での i-ウムラウトによる前母音の前では硬口蓋化が起こった形跡のない例のみであると言えるであろう。それは上記の cælp, forgægan, cæg のような例である。

なお cælp は上記のとおり古くは *kalip だったのであり、アングロ・フリジア語では本来これはまず WGmc a の前舌化により *kælip、硬口蓋化により *k’ælip となることを前提とした場合、それ以降は i-ウムラウトと歯擦音化などにより **celep、あるいは i-ウムラウトと歯擦音化に先立ち *k’ælip への硬口蓋二重母音化が加わり **cielip となるのが規則的な発達である。しかし WGmc a の前舌化後の *kælip、あるいはさらにそこへ硬口蓋化が加わった *k’ælip は接辞に後母音を有する不定詞 calan などの影響で語根母音 æ が類推的に a に置き換えられて *kalip に逆戻りしたために i-ウムラウトのみを反映する cælp となったと考えられる。

これに対し古フリジア語では古英語とは異なり、硬口蓋化、i-ウムラウトが割れに先立って起こったとされるが、古フリジア語では硬口蓋化、i-ウムラウトという順序の根拠は古英語の場合と同じである。そして語頭の [k]、[g] に後続する母音が後母音の i-ウムラウトに由来する前母音であった場合には硬口蓋化は起こらず、[k]、[g] は軟口蓋音のまま保たれ、[g] は閉鎖音 [g] となった点は古英語と同じである。例: kēla (OE cēlan); kening (OE cyning, cining); kenna (OE cennan); kelde ‘coldness’ <*kaldī; kētha (OE cýpan); gēs (OE gēs); gendze (OE genge); gelden (OE gylden (Kt gelden))。

さらに硬口蓋化に関して付け加えるならば、Stiles(1995: 200) は前述のように WGmc ai の古フリジア語における単母音化は硬口蓋化に先立って起こったとしているが、語頭の g が WGmc ai の単母音化に由来する ē の前で軟口蓋音のまま保たれている、すなわち硬口蓋化が単母音化の時点ではすでに終了していたことを示していると考えられる例が見られる。その例としてすでに Campbell (1939: 107) が、そしてさらに Bremmer (2009: 31) が gēr ‘spear’ (OE gār, ON geirr) を挙げていることに注目すべきであり、これは明らかに Stiles に対する反例となるものである。

また古英語では割れが i-ウムラウトに先立って起こっていたことは明らかであるのに対し、古フリジア語では i-ウムラウト、割れの順であったとされるのはなぜであろうか。

古フリジア語における割れは e (<WGmc e)、i がともに ch[xx]、chs[xs]、cht[xt] の前で iu となるという変化であり、このように古英語における割れに比べ、その対象となる母音も、そしてそれが起こる条件もはるかに限定されていた。例: tiuch ‘team; parcel of land’ (OE tiohhian ‘to intend, to judge’); *miuhs, *miux ‘dung’ (ModWFriss mjoks, ModEFriss miux, OE miox, meox); fiuchta ‘to fight’ (OE feohtan, OS, OHG fehtan); siuchst ‘you see’, siucht ‘he sees’ (OE siehst, siehp, -siohð) <*sihist, *sihiþ<*sih^wisi, *sih^wiþi<IE *sek^wesi, *sek^weti

(Go saihvis, saihvij, OHG sihit)。

そして割れは閉音節で起こったのであり、例えば *siuchst*, *siucht* ではその前段階 **sihist*, **sihij* での接辞母音 *i* の消失が割れにつながったということになる。すなわち強変化動詞の直説法現在 2、3 人称単数で *i*-ウムラウトの要因であるこの接辞母音 *i* の消失が割れにつながっていることから、Campbell(1939: 105)、Stiles(1995: 194-195)、Bremmer(2009: 35) が主張するように、古フリジア語での生起順序は古英語の場合とは異なり、*i*-ウムラウト、割れであったと考えられるのであるが、例えば OE *mieht* ‘power’ (<**meahti*<**mæhti*<WGmc **mahti*) と同族語である OFris *mecht* がさらに割れにより ***miucht* となることはなかったことから、*i*-ウムラウトの段階ではすでに割れが終了していた、すなわち生起順序は割れ、*i*-ウムラウトではなかったのかという疑問が生じる。しかし割れの段階では *i*-ウムラウトによる出力は割れの入力となる (WGmc *e*>) *e* とはまだ完全には併合していなかった、すなわち割れの入力となるには至っていなかったとする Bremmer(2009: 30) の主張を是とするなら、やはり *i*-ウムラウト、割れという順序が正しいということになるであろう。

他方、*plicht* ‘power’ (<**pleh-ti*-)、*wicht* ‘weight’ (<**weh-ti*-) のような女性 *i*-語幹名詞である **-ti*-語幹名詞には割れが起こっていない。その原因について Bremmer (2009: 34) は *ch*[*x*] が後続の接辞母音 *i* の影響で硬口蓋化されたためであるとしている。もしそうであれば、*i*-ウムラウト、割れという順序のもとで、同じく **-ti*-語幹名詞に由来する *mecht* における割れの欠如についても割れの段階でその語根母音 *e* が割れの入力となり得る *e* と仮に併合していたとしても、*t* の前の *ch* がかつての後続の *i* の影響で硬口蓋化されていたため割れの生起には至らなかったという解釈も可能かもしれない。

siuchst, *siucht* においても状況は **-ti*-語幹名詞と同様ではなかったかと思われるのであるが、それにもかかわらず割れが起こっているのはなぜであろうか。あるいは **-ti*-語幹名詞における割れの欠如には Bremmer の主張とは何か別の原因があるのであろうか。*siuchst*, *siucht* の前段階はそれぞれ **sichist*, **sichith* だったのであり、この場合も先行の語根末子音 [*x*] が硬口蓋化されることは十分あり得ると思われることから、**sichist*, **sichith* から *siuchst*, *siucht* ではなく割れない ***sichst*, ***sicht* となっていたとしても不思議ではないであろう。接辞 **-ist*, **-ith* は語中音消失を経て *-st*, *-t* となったのであるが、語根末子音 *ch*[*x*] がかつて実際に後続の *i* によっていったんは硬口蓋化されていたことがあったかどうかはともかく、結果として *ch* は割れの段階では軟口蓋音 [*x*] であり、それが後続の接辞子音と結合して閉音節を形成し、割れを引き起こしたと考えられる。

それでは同じく早期に接辞母音 *i* が消失していたと考えられる **-ti*-語幹名詞の場合には [*x*] の硬口蓋化が割れの時点まで保たれていたというのはなぜなのであろうか。可能性としては、接辞母音 *i* または *ī* が消失や弱化を免れて長く保たれていたと思われる単数斜格形や複数形の影響が考えられる。

4. 結語

以上のように、古英語と古フリジア語の音変化には確かに多くの共通点と類似点が見られるのであるが、類似点についてはあくまでも類似点であり、相違点という要素が含まれていることもまた事実である。しかし西ゲルマン語の中の北海ゲルマン語という言語群にあって、この両言語がさらにアングロ・フリジア語という中間祖語に基づく独自のグループを成していたことは否定できないであろう。

このようにアングロ・フリジア語という概念を是とするならば、そこへさかのぼる可能性が極めて高いと思われる音変化としては少なくとも WGmc *a*, *ā* の *ā*, *ā̄* への鼻音化、*ā̄* (WGmc *ā* に由来するもののほか *a* + 鼻音 + 無声摩擦音という結合において生じていたものを含む) の円唇化、そして鼻音化の環境にはなかった WGmc *a*, *ā*

の前舌化を挙げることができるであろう。

[k, kk, g, gg] は硬口蓋化 (>[k', kk', g', gg']) を経て歯擦音化、そして [g] については硬口蓋化 (>[g']) とそれに続く Gmc [j] との併合とさらに母音化という類似した発達を示すことから、特に硬口蓋化はアングロ・フリジア語の段階で起こったとする見方が可能かもしれないが、両言語での歯擦音化の結果が同一であるわけではなく、また歯擦音化の結果の分布状況にも不一致が少なくはないことから、硬口蓋化は両言語で個別に起こったとする見方も可能かもしれない。しかし硬口蓋化はあくまでもアングロ・フリジア語にさかのぼる現象であり、その不一致と思われる結果は両言語における語形変化表内での均等化の方向が異なっていたからにすぎないとも考えられる。

WGmc ai, au の変化については、アングロ・フリジア語における変化としての WGmc a の前舌化と完全に関連づけて論じることが議論を複雑化してしまうことは確かであり、これらの二重母音は WGmc a の動向とは無関係であったとする見方もあることは事実である。しかし WGmc au の変化についてはその関係性を認めた見方も可能かもしれない。

本稿で取り上げた音変化をアングロ・フリジア語から WGmc ai の変化は除外した形で生起順に挙げると：

- ・WGmc a, ā の ā, ǣ への鼻音化。
- ・ā (WGmc ā に由来するもののほか、a + 鼻音 + 無声摩擦音という結合において生じていたものを含む) の円唇化。
- ・鼻音化の環境にはなかった WGmc a, ā の前舌化。
- ・[k, kk, g, gg, g] の硬口蓋化 (>[k', kk', g', gg', g'])。
- ・続いて古英語と古フリジア語に分裂後、WGmc ai, au の変化、割れ、i-ウムラウト、[k', kk', g', gg'] の歯擦音化、あるいは歯擦音化されずに軟口蓋音への逆戻り (OE calan, sēcp)、[g] の硬口蓋化 (>[g']) とそれに続く Gmc [j] との併合と母音化が両言語において個別に独自の順序で起こったと考えられる。

他方、Fulk の主張する (WGmc au>)æu>au>ā、あるいは Goblirsch の主張する (WGmc au>)ēa>eā>ā のようにアングロ・フリジア語における WGmc a の前舌化のケースに WGmc au の第1要素も含まれるならば、OFris kâpia, kās の語頭子音もまた軟口蓋音への逆戻りの結果であるということになる。

そしてさらにアングロ・フリジア語から WGmc ai の変化のほか硬口蓋化も除外した形で示すと：

- ・WGmc a, ā の ā, ǣ への鼻音化。
- ・ā (WGmc ā に由来するもののほか、a + 鼻音 + 無声摩擦音という結合において生じていたものを含む) の円唇化。
- ・鼻音化の環境にはなかった WGmc a, ā の前舌化。
- ・続いて古英語と古フリジア語に分裂後、さらに WGmc ai, au の変化、割れ、i-ウムラウト、[k, kk, g, gg] の硬口蓋化 (>[k', kk', g', gg']) とさらに歯擦音化、あるいは歯擦音化されずに軟口蓋音への逆戻り (OE sēcp)、[g] の硬口蓋化 (>[g']) とそれに続く Gmc [j] との併合と母音化が両言語において個別に独自の順序で起こったということになる。

そしてこの場合も同じく、Fulk の主張する (WGmc au>) æu>au>ā、あるいは Goblirsch の主張する (WGmc au>)ēa>eā>ā のようにアングロ・フリジア語における WGmc a の前舌化のケースに WGmc au の第1要素も含

まれるならば、OFris *kāpia*, *kās* の語頭子音もまた軟口蓋音への逆戻りの結果であるということになる。また (WGmc **kalan*>) OE *calan* を例にとると、アングロ・フリジア語では硬口蓋化はまだ起こっていなかったということを前提としている以上、アングロ・フリジア語では硬口蓋化を有する **kælan* ではなく WGmc *a* の前舌化のみを示す **kælan* であったということになる。また古英語において硬口蓋化が起こる前に語根母音 *æ* が次音節の *a* の影響で *a* に逆戻りしていたために語頭の [k] が次の段階である硬口蓋化を受けることはあり得ない以上、[k] は [k] の [k] への逆戻りではなく、WGmc [k] が軟口蓋音のまま維持されたものということになる。

WGmc *a* の前舌化のケースに WGmc *au* の第1要素も含まれるのか否か、そして硬口蓋化をアングロ・フリジア語の現象としてとらえるか否かが結果として主要な問題として浮かび上がり、またそれが古英語と古フリジア語の音韻組織の成立過程についての解釈の違いにもつながっていることは明らかであろう。本稿では WGmc *a*, *ā* の前舌化とともに WGmc *au* の第1要素の前舌化と硬口蓋化を取ってアングロ・フリジア語における現象としてとらえた見方を重視した考察も試みたわけであるが、今後もアングロ・フリジア語についてのさらなる議論の進展を期待したい。

[参考文献]

- Bennett, W. H. 1950. "The Germanic development of Indo-European *ē*." *Lg.* 26, 232-235.
- Boutkan, D. & S. M. Siebinga. 2005. *Old Frisian etymological dictionary*. Leiden: Brill.
- Bremmer, R. 2009. *An introduction to Old Frisian*. Amsterdam: Benjamins.
- Campbell, A. 1939. "Some Old Frisian sound-changes." *TPS* 38, 78-107.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Fulk, R. D. 1998. "The chronology of Anglo-Frisian sound changes." *ABāG* 49, 139-154.
- Goblirsch, K. G. 1991. "Germanic *ai* and *au* in Anglo-Frisian." *ABāG* 33, 17-23.
- Grønvik, O. 1998. *Untersuchungen zur älteren nordischen und germanischen Sprachgeschichte*. Frankfurt-am-Main: Peter Lang.
- Hogg, R. M. 1992. *A grammar of Old English*. Vol. I: *Phonology*. Oxford: Blackwell.
- Holthausen, F. 1974³. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Holthausen, F. & D. Hofmann. 1985². *Altfriesisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Kortlandt, F. 2008. "Anglo-Frisian." *NOWELE* 54/55, 265-278.
- Krupatkin, Y. B. 1970. "From Germanic to English and Frisian." *Us Wurk* 19, 49-71.
- Laker, S. 2007. "Palatalizations of velars: a major link of Old English and Old Frisian." *ABāG* 64, 165-184.
- Lass, R. 1994. *Old English: a historical linguistic companion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Luick, K. 1935. "Zur Palatalisierung." *Anglia* 47, 273-286.
- Ramat, P. 1969. *Grammatica dell'antico sassone*. Milan: Mursia.
- Ringe, D. & A. Taylor. 2014. *The development of Old English: a linguistic history of English*. Vol. II. Oxford: Oxford University Press.
- Seebold, E. 1970. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague: Mouton.
- Stiles, P. V. 1995. "Remarks on the 'Anglo-Frisian' thesis." *Friesische Studien* II, ed. V. F. Faltings, A. G. H.

Walker and O. Wilt[s]=NOWELE Suppl. 12(1995)], 177-220.

Voyles, J. B. 1992. *Early Germanic grammar: pre-, proto-, and post-Germanic languages*. San Diego: Academic Press.

Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.